

令和5年度 東洋大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラムに係る自己点検・評価結果

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	令和5年度入学生は、「情報連携学部(1年次配当4科目)」で305名中301名(98.7%)が履修し269名～299名(89.4%～99.3%)が単位を修得、「総合情報学部(2科目)」で271名中68名・99名(25.1%・36.5%)が履修し65名・88名(95.6%・88.9%)が単位を修得、「その他学部(2科目)※2年次配当の国際学部グローバル・イノベーション学科を除く」で6951名中94名・215名(1.4%・3.1%)が履修し80名・168名(85.1%・78.1%)が単位を修得した。これらを教務部全学学務推進課が教務システムで確認し、全学カリキュラム委員会で点検・評価を行っている。
学修成果	4つのプログラムについて受講対象に合わせて講義の目的・内容、学習到達目標を設定しており、授業や指導の方法についても学習効果を高めるため工夫を凝らしている。理解度を確認するための小テスト、考える力を養うための双方向型のディスカッションやグループ学習、プレゼンテーションを盛り込み、理解の定着を図っている。プログラムあるいは科目単位の授業アンケートやプログラム全体の外部評価を実施し、それらを含む実施結果を全学カリキュラム委員会で確認し、学部長会議へも報告している。
学生アンケート等を通じた学生の理解度	プログラムあるいは科目に適した方法で授業アンケートを実施し、学修内容の理解度を確認するとともに分析に役立てている(令和5年度入学生に限定せず受講者全体へ実施)。理解度に関するアンケート結果は、プログラム、科目、学部(キャンパス)によって異なる傾向であったが、これはプログラムや科目によって授業の内容や方法、位置づけや難易度が異なることが影響していると考えられる。授業アンケートの結果を授業担当教員へフィードバックし授業改善に活用するとともに、全学カリキュラム委員会で確認しプログラムや科目の在り方について客観的に点検・評価することで、更なる向上に役立てる。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	プログラムあるいは科目に適した方法で授業アンケートを実施し、推薦度を確認するとともに分析に役立てている(令和5年度入学生に限定せず受講者全体へ実施)。推薦度に関するアンケート結果は、理解度に関するアンケート結果と同じ傾向であった。低めの傾向が出ていた学部(キャンパス)については理解度を向上させることによって推薦度が高まるよう改善していき、この取り組みの結果を活かした広報も積極的に展開していく。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	令和5年度入学生全員に対して、年度初めに本学公式アプリで本プログラムの周知を行った。また学内教職員に対しては、全学カリキュラム委員会を通じてプログラム醸成の協力を仰ぎ、各学部における推奨で履修者数の向上を目指してきた。まだ十分にプログラムが浸透していないため、今後はその他の媒体や方法を活用した働きかけも行っていく。また、真の意味で学びが活きるよう学習成果を実感できる仕組みやプログラム修得における就職活動等への利用を検討していきたい。また、将来的には全学部・学科で必修とすることで全体の底上げを図り、数理・データサイエンス・AI教育を強化していきたい。

学外からの視点		
教育プログラム 修了者の進路、 活躍状況、企業 等の評価		令和5年度からプログラムを開始しており、プログラムを修得した卒業生がいないため、プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価を得るところまでは至っていないが、今後は学長室や就職・キャリア支援部と連携し、卒業生を対象に実施している卒業生アンケートや就職・進路状況調査を活用した分析を行いたいと考えている。その際は数理・データサイエンス・AI分野に直結する企業のみならず、当該分野の知識を活かし多種多様な進路で活躍する人材を含めて広く分析し、その結果を活用して在校生の学びを後押ししていきたい。
産業界からの視 点を含めた教育 プログラム内 容・手法等への 意見		外部評価者2名にプログラムの内容・手法、実施結果、実施体制を評価いただき、全体を通して概ね肯定的な意見をいただいた。内容・手法については網羅的かつ実践的な内容であり、次世代の社会と産業界のニーズに合わせた柔軟で適応性の高い教育を行っているとの評価をいただいた。その一方で改善点やより発展させるための方策についても助言があったため、これらについて全学カリキュラム委員会へ報告しプログラムの検証を行うとともに、授業担当教員へもフィードバックし授業内容の見直しの参考とした。
数理・データサイ エンス・A Iを「学 ぶ楽しさ」「学ぶこ との意義」を理解 させること		データを実際に活用することが楽しさを実感することと捉え、どのようなシーン、手法でデータが活用されているか事例を盛り込みながら説明しており、理解を深めながら身近なものとして捉えてもらう工夫をしている。専門性も志向も様々な学生がいる中で満遍なく教育を行うには、当該分野と親和性が低い学部 of 学生へ丁寧に働きかけることが特に重要と考えていることから、多様な専門領域を擁する本学ならではの方法を検討し、学生によりマッチした内容を展開できればと考えている。本プログラムを契機として、今後も全学カリキュラム委員会や外部評価者のアイディアを確認する等して、開けたかたちで可能性を模索していきたい。
内容・水準を維持・ 向上しつつ、より 「分かりやすい」 授業とすること		学部独自の専門教育を展開している「総合情報学部」や「情報連携学部」は、プログラムの範囲に留まらず、学生が更に高度な知識や技術を習得することを目指し授業を展開し、「その他の学部」においてはボトムアップを図り、モデルカリキュラムや最新的话题を踏まえた授業を展開し、学生のレベルや希望に応じた段階的・体系的な授業を行う。当該分野を専門とする教員のノウハウを最大限に活用し、本学の特徴を捉えた内容や手法を精査することで、更なる向上を図りたい。併せて学生の学習環境や体制の促進、授業アンケート結果を踏まえた改善を行い、より分かりやすい授業を目指していく。

令和6年3月22日
東洋大学 全学カリキュラム委員会